

# 縄文時代の集落をめぐって

岡 本 勇

- |             |                    |
|-------------|--------------------|
| 1. はじめに     | 4. 竪穴住居の復元         |
| 2. 集落址研究の回顧 | 5. 住居址・住居址群・集落址の研究 |
| 3. 集落址研究の視点 |                    |

## 1. はじめに

縄文時代の集落について、大きく二つに分けて話しを進めたいと思います。一つは縄文時代の集落ないし集落址研究をめぐる問題。もう一つは、現在私達が携わっております横浜市港北ニュータウン地域内の、縄文時代集落址の発掘例を中心とした問題です。考古学研究の上で集落址のもつ意義についてまず考えてみたいと思います。いうまでもなく考古学は、歴史学の一分野に属します。その考古学のなかで、当時の社会がどんな社会であったか、また社会の仕組みがどうであったかなどの問題は、とうぜんのことながら遺跡、遺物の面から考えていかなければなりません。その遺跡、遺物のなかで、もっとも有効な資料として、まず集落址があげられます。ついで埋葬その他の研究があるでしょう。したがって、縄文時代の集落址の研究は、なによりもまずその時代の社会の仕組み、あるいは当時の人間の集団がどういうものであったかを追求していくための手立てである、といっていいだろうと思います。よく集落を、人文地理学的な観点からとりあげる場合もありますが、これは私たちの研究とは一応別であります。

また近年では、文化人類学、あるいは社会人類学の領域で、未開社会、原始社会の構造がさかんに問題にされており、活発な発言が聞かれもいたします。そこでは、具体的な民族例にもとづき、洗練された理論でのまとめがなされています。私たちに関係のあるものとしては、たとえば、『季刊人類学』という雑誌がありますが、このなかに大林太良氏の、「縄文時代の社会組織」という膨大な論文があります(編注1)。しかし、この文化人類学なり、社会人類学の側からの発言というものは、歴史学ないし考古学の立場で社会構造をあきらかにするということと比べた場合、一定の限界があるのをみとめざるをえません。その限界とは、人類学の場合は、個別的な事例を、ある一定の理論にもとづいて、段階的に配列しているというような傾向をふくんでいることです。したがってそこには、いわゆる歴史性が欠如しています。私たちは、文化人類学や、社会人類学の成果から、多くのことを学ばなければなりませんが、そのさいに、一定の限界のあることをわきまえておくべきだと思います。

いま、私たちにとって必要なことは、縄文時代の社会を歴史的に、発展的にみていくことがあります。しかし、そうはいうものの、ここでどれだけその話しを具体的に展開できるか。卒

直にいって、自信はありません。

## 2. 集落址研究の回顧

ところで、縄文時代の集落址研究が、どのようにおこなわれてきたかを、おおまかにふりかえってみたいと思います。

敗戦を境にして考古学研究は大きく変わるわけですが、敗戦前の場合をみると、集落址研究はまだ、軌道に乗っていたとはいえない。むしろ、集落址の単位をなす個々の住居址の研究が主流であったといって差し支えありません。大正15年に東京大学の人類学教室が、千葉県市川市の姥山貝塚を組織的に発掘し、20数戸の竪穴住居址を掘り出しました<sup>(編注2)</sup>。これは竪穴住居址が本格的に発掘された最初の例であるとともに、住居址研究の第一ページを飾るにふさわしい仕事がありました。それ以後各地で住居址の発掘があいついでおこなわれ、年代的な差異や、いくつかのタイプのあることなどがわかってきました。

こうしたなかで住居址の研究に大きな足跡を残されたのは、後藤守一氏であります。後藤氏は、『人類学先史学講座』のなかで、「上古時代の住居」<sup>(編注3)</sup>についてまとめております。そし



第1図 C-16・17遺跡（中期）

て、その時点で発掘された縄文時代の住居址を網羅し、そこから考えられる問題を総ざらいに提起しております。また、その住居址の集合体である集落址にも目を向けておりますが、「塊村」というような言葉が使われていることからもわかるように、まだ人文地理学的な理解の範囲を大きくこえてはおりません。

しかし、後藤氏の、集落址研究にたいする理解には、なみなみならぬものがあり、敗戦後の調査のなかでは、登呂遺跡（静岡市）、瓜郷遺跡（豊橋市）、蜆塚遺跡（浜松市）などで、つねに集落という観点から遺跡をとらえ、発掘していくという態度が貫かれていました。この点は、とくに声を大にしておきたいと思います。

第二次世界大戦後の集落址研究で大きな位置を占めるものに、和島誠一氏の業績があります。和島氏は今日の考古学上の集落址研究の、いわば基礎を築いた方であります。敗戦後間もないころに発表されました「原始聚落の構成」<sup>(編注4)</sup>という論文がありますが、これは今日、古典的な意味を一方でもちながらも、依然として光を放っています。縄文時代の集落に限っていいますと、和島氏はそのなかで、埼玉県の水子大応寺貝塚を例にあげて、個々の住居を結合する場としての集落を重視しています。そして、その結合体である、共同体を前面に出して考えています。

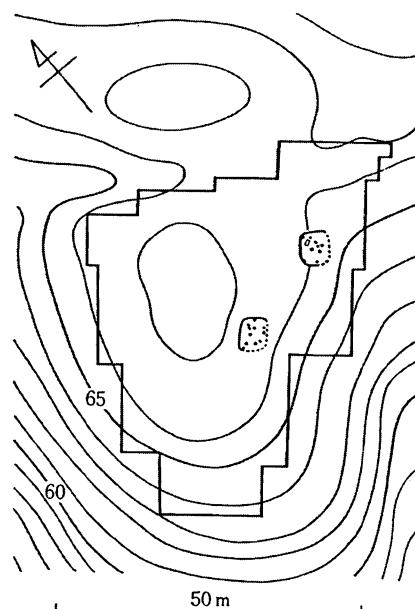
この和島氏の研究は、その後昭和30年横浜市港北区の南堀貝塚において、さらに具体的に展開されます。ここでは、縄文時代前期の集落址を完掘し、そして広場を囲んだ一定の形態の集落があるということを明確にしたわけです。私もその際に調査をともにいたしました、翌々年には横浜市史の「第一巻」<sup>(編注5)</sup>に、この調査の成果のあらましをまとめさせていただきました。

その後の集落址研究は多彩ですが、注目すべきものに水野正好氏の仕事があります。昭和44年、水野氏は、「縄文時代集落研究への基礎的操作」<sup>(編注6)</sup>という論文を『古代文化』誌上に書いております。これは興味深い文献であると思います。その論文を簡単に紹介しますと、一番目に「住まいとしての住居」をとりあげています。そして、その住居の規模、家族員、住居の間取り、「間」とその使用の形というような項目に分けています。二番目に「住まいのうごき」として、住まいの建て直し、住まいの建て替え、住まいの動きという、三つの項目が挙げられています。三番目の「村の歴史」というのは、住まいの流れ、村のあり方、家族のあり方、村の中での家族の動きという四つの項目から成り立っています。四番目は「村の構造と機能」ということで、村の「場」と機能、村の構造と用益の形態。五番目は「村のうごきと領域」、これは村の移住と諸形態、本村と分村、村のテリトリーというような項目にわけられています。これらの項目だけでは中身はおわかりいただけないと思いますが、こういう形で、「住まいとしての住居」「住まいのうごき」「村の歴史」「村の構造と機能」「村のうごきと領域」といったようなタイトルからうかがえるように、ここでは集落の問題を、かなり突っ込んでとりあげているわけです。しかし、この論文が書かれた動機を水野氏は、最後でこういっています。

「私はいまだかつて縄文時代集落址について、フィールドを持ったことはない。おそらくそれだけに、現実に即さない推測がかなり指摘されることとなろう。そうした危惧を持ちながらも、なお、このようにまとめねばならない気持ちに私を駆り立てたのは、りっぱな遺跡が次々と破壊され、失われていく今日、何よりもまず、明確な集落論を配置した調査が行われなければならないからである。発掘範囲、発掘範囲外の遺構の有無、遺構の正確な実測、遺物の詳細な発見状況すら十分に図示されていない現状では、多くの発掘は、生きた歴史に連ならないであろう」と。こういう氏の考え方方が根底にあって、この論文は書かれたわけあります。ここでもいっているように、縄文時代の集落址について、フィールドを持ったことはない。また、この論文は、動く手と、働く想念の結合として書かれたものである、というようなことも最初に述べています。さらに、今までの調査には、想念と問題意識を持った調査が乏しい、ということも言っております。大変鋭い指摘が随所に見出され、また新鮮な問題意識が展開されています。しかし、私なりに結論としていいますと、想念による研究の先取りである、という評価をくださいざるをえません。

個々の詳しいことがらは抜きにいたしますが、大変重要な問題提起をしておりながらも、研究の結果としては、想念による先取り的なものである、というふうにいわなければならぬのです。しかし水野氏の先取りした想念を、現在の集落址研究は現実の調査のなかで追認しているケースが多いというのが実情ではないかと思います。その意味では水野氏の論文は、今日の研究方向を示している一つの労作であります。

ところで、最近の集落址研究は、どういう動きを示しているかといいますと、私は、二つの動きに分けられるだろうと思います。一つは、分析的な方向であります。この分析というものは、もっぱら集落址を構成する個々の住居址にかんする分析的な方向です。いわゆる「何々パターン」というのはこれに含められるものだと思いますし、また、セツルメント・アーケオロジーの方法論を使った調査というのも、これに関連するものだといってよいでしょう。また、もう一つは、広い視野でとらえる考え方であります。集落を規定しているというか、集落を位置づけている地域を、領域——テリトリーとしてとらえる方向であります。このさいに、生物生態学——エコロジーの知識が活用されているのも一つの特徴だろうと思います。先年、『考古学研究』誌上に発表された林謙作氏の論文<sup>(編注7)</sup>などは、その一例であります。現在、集落址の研究は、比較的豊富な資料をかかえな



第2図 リー10遺跡（早期、稻荷台期）

がらも、それを方法的にどう整理していくか、分析・総合していくかということで、一つのいわば、岐路に立っているように思えてなりません。私たちは、分析的な方法とより広い視野での把握、さらには文化人類学ないしは社会人類学の成果の活用、いろいろな角度・立場からの、総合的な集落址研究の道を歩んでいく必要があるのではないかと考えます。

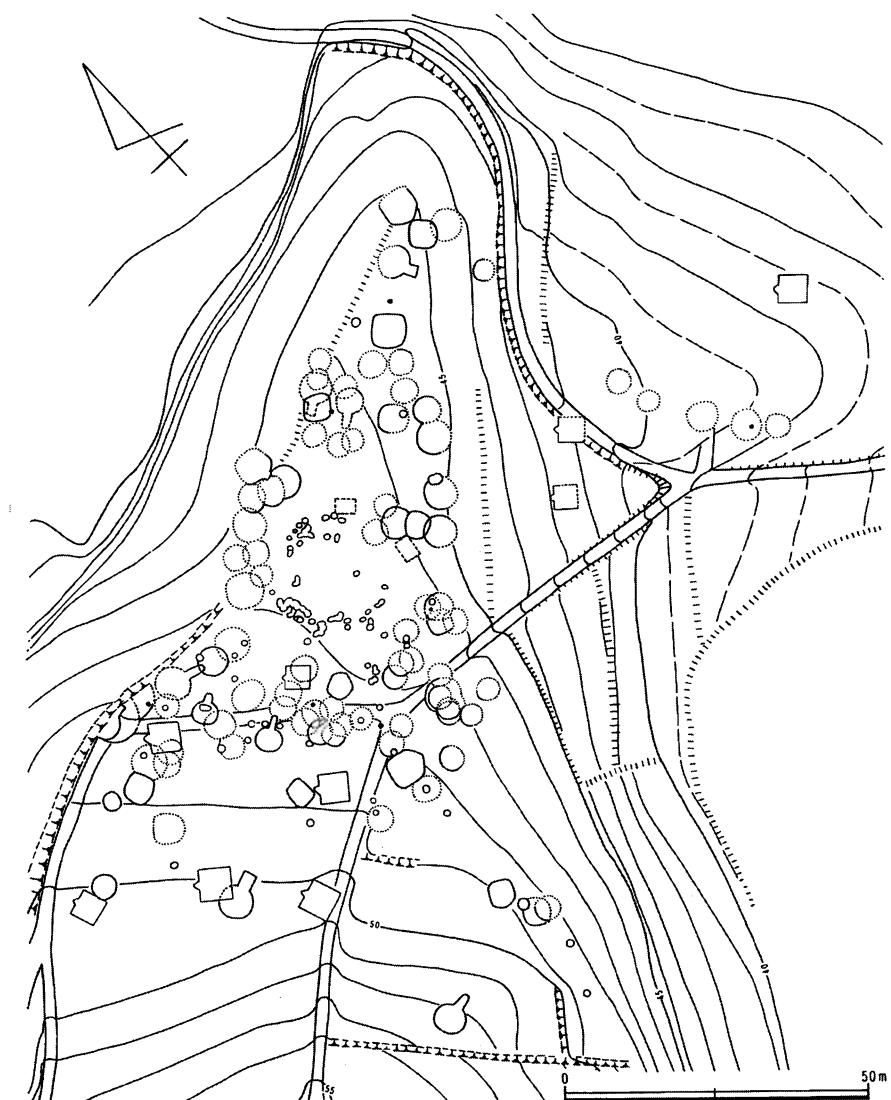
### 3. 集落址研究の視点

つぎに、集落址研究の視点といったことで話しをしたいと思います。集落址をみていく場合に、集落（址）自体と、集落（址）相互の二つの視点があるだろうと思います。

はじめの集落（址）自体の問題ですが、ここでは何が必要かといいますと、(1)同時に存在した住居址の確定。(2)集落としての利用期間と形態。つぎに、(3)集落が営まれた当時の生活面、通路、住居以外の施設の確認。それから、(4)住居の構造、使用年数。さらに、(5)住居の居住人員。大きくみて、五つの問題があると思います。一番目の同時存在の住居の確定ということは、集落址研究の基礎をなすものであります。二番目は文字どおり、集落の利用（居住）期間とその形態の問題です。集落の規模も形態も、この事実にもとづいてあきらかにされます。三番目は、現在あまり集落址研究のなかではとりあげられません。当時の生活面を把握する、通路を見つけ出す、あるいは住居以外の施設をあきらかにするといったようなことは、問題意識としてはもちろん、現実にはなかなか、作業上不可能な課題であります。しかし、これは集落の形態、機能を問題にする上で避けてとおることはできないだろうと思います。四番目の住居の構造、これは、復原した場合にどういう住居になるかということを含めた問題です。それから使用年数、耐用年数といういい方をしてもいいかと思いますが、これは集落の存続期間を問題にする上で、きわめて重要なことがらです。五番目の住居の居住人員、一軒の家にどれだけどれだけの人間が住んでいたかという問題です。これは一定の結論は出しにくいと思いますが、ある程度の見通しは立てなければなりません。この問題は、集落の人口つまり集団の規模を知る上で、これまた不可欠の課題であります。集落址研究においては、集落自体について以上のような問題を取り組んでいく必要があります。

ところで一番目の課題というのは、これは最も基礎的なものです。集落址の調査に携わった方はおわかりだと思いますが、時期的に単純な集落址というものは、ほとんど見当りません。単純な集落址というのは、一つのムラがそのままわかる状態です。ムラがそのままわかる状態の集落址というのは、きわめて稀だと思います。普通は大体が、ある時間的な幅のなかで、継続的に、あるいは断続的につくられていったものです。したがって個々の住居址は、大部分が重複しているという状態です。したがって、この重複した住居址の分析ということが、どうしても必要になってくるわけです。

ここでちょっと、重複した住居址の分析の問題について考えてみたいと思います。この重複



第3図 池辺第3遺跡（中期末）  
 （堅穴住居址、土壌群、長方形柱穴列、貯蔵穴などからなる集落址  
 方形プランの住居址は古墳時代に属する）

した住居址には、結論的にいいますと、まず非連続型といっていいようなものがあります。一軒の家がつくられたのち、それが廃棄され、またその後につくられる。つまり二つのあいだに時間的な断続があるというケース。これに対して連続型、これは二つの住居の間の、時間的な幅がほとんどないか、あるいはわずかであるというケース。この二つが考えられるわけです。

いずれもこれは、使用されてきたものが、どういうような経過をもって建て替えられたり、あるいは建て直されたりしていくかということを考えてみると、非連続型の場合、移動、老朽、焼失、忌避、その他のケースがあろうかと思います。一方連続型の場合は、非連続型の場

合と同様に、老朽した場合、焼失した場合がありますけれども、そのほかに、移動していたものが、また戻ってくるという回帰。それからもう一つは、住居を拡張するという場合を考えられます。非連続型の場合には、いまあげたような原因で住居が廃棄されるわけですが、廃棄されてから、徐々に埋没していく。それが埋没し切ったこともあるでしょうし、また埋没しきらないで、摺鉢状にくぼんでいた場合もあったと思います。そういうところに新しく住居が建てられる。この場合には、新築ということになるでしょう。

一方、連続型の場合には、いまあげた回帰、老朽、焼失、拡張、その他の理由で、その位置に家を建て替えるもので、いわば改築ということになるでしょう。こういう図式が一応考えられるわけですが、その結果、重複した住居址は、どういうあり方をするのかといいますと、非連続型の場合には、重複の仕方が、概して不規則な複合を露呈します。それにたいして連続型の場合をおおむね規則的な複合を呈するのが普通であります。ですから私たちは、重複した住居址がどんな状態であるのかということを分析し、その住居のもつ意味を考えていく必要があるだろうと思います。

結局のところ、新築というのは非連続な場合にひきおこされるのにたいして、改築の場合は連続的になされるわけです。ところで、その改築の必要性というのはいったいなんなのかということを考えてみる必要があります。一番の理由としてあげられる老朽の場合は、建築材の老朽、腐朽が原因です。屋根、柱、あるいは壁体の腐蝕が最もはやいで、その取り替えがおこなわれます。焼失した場合には、だいたい全部が取り替えられるわけですから、あまり問題はありません。回帰の場合は、移動して帰ってきたら、大変傷んでいるので取り替えるというケースが一般であろうと思われます。それでは、改築の証拠を実際の資料で、どうとらえることができるでしょうか。これは壁溝や柱穴のあり方から、柱穴がダブっていたり、壁溝がダブっているというようなことを手がかりに、その証拠をつかむことができます。

#### 4. 竪穴住居の復原

いま、改築の話をしましたが、この理解を容易にするために、つぎに住居の復原構造に関して、少し説明させていただきたいと思います。

ここでは、縄文時代の住居、弥生時代の住居という枠をはずして、竪穴住居址一般ということで話をいたします。まず、一番はっきりさせておきたい点は土堤の存在です。竪穴は当時の地表面から赤土まで深く掘り下げるわけですが、この際に掘り出した多量の土は、竪穴の周囲に盛り上げて一種の土堤を構築します。これを私たちは「土堤」と呼んでおりますが、最近、都出比呂志氏などは、「周堤」<sup>(編注8)</sup>といっています。周堤の存在は弥生時代の住居の場合には、すでに静岡市の登呂遺跡の住居などでわかっておりました。また、特殊な例ですが、静岡県の大畠貝塚<sup>(編注9)</sup>（後期）などで発掘したこともあります。さらに、和島誠一氏が調査しまし

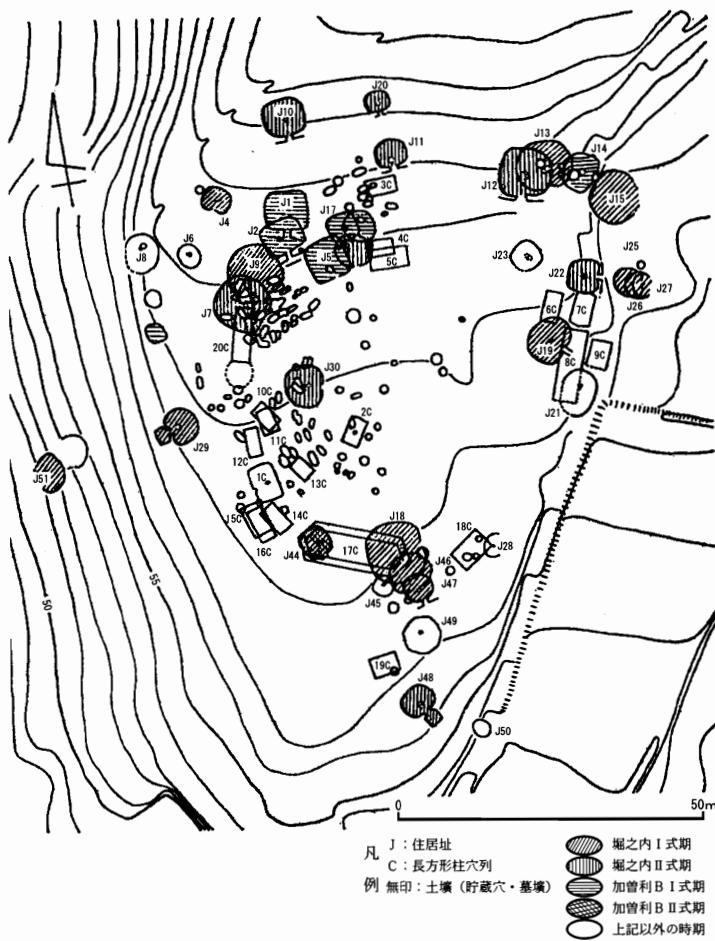
た、茨城県下の前期の貝塚で発見された竪穴住居址の場合は、覆土中の貝層と、竪穴外の貝層が土堤を境にふり分けるようにして堆積していた（編注10）ということです。

竪穴住居の壁の外側には土堤がめぐり、それはかたく踏みかためられていたであろうという考えは、ほぼ誤りないものと思います。

港北ニュータウンのなかでC8遺跡、別の名を大塚遺跡とよんでいる環濠集落址の竪穴住居の場合にも、この土堤の存在を考えさせるような例に遭遇しております。当時の地表面の上に、さらにかなりの高さの土盛りをしておりますので、床面からその土堤の上面までは、かなりの深さになる。おそらく、1メートル前後、あるいはそれ以上の高さを考えても間違いないと思います。そうなってきますと、出入の際に飛び込むような降り方とか、はい上がるような出方では困るわけでして、昇り降りのはしごが必要になってきます。

はしごの存在につきましては、「周堤」の用語を提案しました都出比呂志氏なども述べておりますが、私たちもはしごそのものの実例を確認したことがあります。それは大塚遺跡の場所です。住居の床面に規則的に配置された4本の柱穴があります。また周囲には壁溝がめぐっております。中央よりやや一方に偏った位置に炉址があります。この炉址の反対側の壁近くに、浅い穴がありますが、これを「はしご穴」とよんでいます。弥生時代の竪穴住居址は、壁、壁溝、床、柱穴、炉、はしご穴、それから特殊なピットなどから、普通なりたっています。

大塚遺跡のY50号住居址、これは火災に遭った住居址ですが、床面には炭になった木材がか



第4図 池辺第14遺跡（後期前半）  
(竪穴住居址、長方形柱穴列、貯蔵穴、土壌などからなる)

なり多量に横たわっていました。幸運にも、ちょうどはしご穴の部分から、幅が20センチで厚さが5センチの焼けた板がみつかりました。板といっても、根元の部分だけですが、心もち斜めの状態を呈していました。また、これを断面でみると、はしご穴というのは、概ね斜めにあけられていますが、はしごがいけられていた状態を示す土層の識別がみとめられました。この斜めの角度を延長していくと、1メートルちょっとの高さで壁の垂直延長線上にたっするわけでありまして、床面から土堤のトップまでは1メートル以上の高さがあったことになります。またそこに、はしごが斜めにかけられていたことが想定できたわけであります。

ついでにはしごのことにふれておきますが、現在使われているはしごは、2本の棒に横木をわたしたものですが、弥生時代のはしごは、幅20センチ、厚さ5センチほどの1枚の板でつくられています。板に切り込みをつけて、そこにつまさきをかけるという形のものです。それから、壁がきわめて高かったわけですが、この壁に沿って、いわゆる壁体がめぐっていました。

壁体がどういう材料であったかは、よくわかりません。しかし、登呂遺跡<sup>(編注11)</sup>の場合は、厚さが1センチほどで幅が20センチ位の板をきちんと並べておりました。横浜市神奈川区の神之木台<sup>(編注12)</sup>という、弥生時代後期の遺跡の場合には、竹を編んだものが、壁に貼るようにめぐっていました。この場合は炭化して残っていたものです。こうした例から推して、板やアンペラといったようなものが壁体に使われていたことが考えられます。縄文時代には、板であったかどうかは、疑問としなければならないと思います。つぎに柱ですが、これはほとんどが丸太であります。細いのは直径10センチ位。太いのは13センチか14センチ位あったようです。意外に細いということがいえるようです。また、弥生時代のものには、丸太でなしに、多少面どりした柱も使われていたことが知られております。

柱や壁体についてですが、柱の場合は、いわゆる掘立柱で根元は地下に埋っている。また、壁体は直接壁に、地肌に密着している。そういうわけで、とりわけ傷みが激しいということが考えられます。一方、屋根の傷みも、おそらく簡単な屋根だっただけに、いちじるしかったろうと思われます。ですから、建築材のうちでも屋根、柱、壁体の腐蝕がとくにはやい。そこで、それらを取替える作業つまり改築がおこなわれるわけです。壁体の場合には、壁体の腐蝕のほかに、壁そのものの崩落も進行しますので、改築のさいには一周り壁を削って、新しいかたい壁をつくり出して、そこに壁体を取り付けるということがおこなわれました。したがって、その結果として、壁溝がいわば、同心円状に外に拡がっていくという結果をまねくわけです。柱の場合には、引き抜くこともあるでしょうし、また、腐蝕した場合にはそのままにしておくこともあったと思いますが、いずれにせよ、新しい柱穴を掘るわけです。ですから、とうぜんそこに柱穴の重複が認められてくることになります。このように壁溝や柱穴の重複は、住居の改築と関連してご理解いただきたいわけであります。

## 5. 住居址・住居址群・集落址の研究

つぎに、集落相互の問題に目をむけてみることにします。集落をみていく場合、個々の住居から始まって、住居の集まりである集落、集落の集まりである集落群、さらには集落群と集落群、そういう関係があるわけです。最小の単位として住居、住居址があります。つぎに、住居の集まりであります住居群、住居址群、これが一般にいわれる集落あるいは集落址であります。つぎに集落址群があります。これはいわば遺跡群ということもできるだろうと思います。それからもう一つ、複数の集落址群。縄文時代の社会の仕組みをみていくとなりますと、たんに個別的な集落だけをとりあげてみても、問題は大きく進展いたしません。その集落址がどうであったかというところまで、目をむけていく必要があるだろうと思います。

地理的な言葉で使い分ければ、住居址群・集落址は地点に相当し、集落址群・遺跡群は地区にあたるわけです。それから、これら複数の集落址は、しいていえば地域ということになる。まさに、一個の住居址から一つの地域までを、集落の問題は含んでいるといわなければなりません。従来の調査研究は、住居址から住居址群・集落址の研究というところまできましたが、集落址群の研究、あるいはそれ以上の複数の集落址群の研究については、まだ手が及んでおりません。したがってここでは、どういう見方が必要なのかということだけを指摘するにとどめて、おきたいと思います。

いうまでもなく、一個の集落だけで社会がつくられていたわけではありません。とうぜん、いくつかの集落があつまって一つの社会をつくっていたと思います。さらに、そのいくつかのあつまりが、他の集落群と相互に関連をもっていたことも、とうぜん考えられます。

いま私たちが、横浜市の港北ニュータウン建設予定地域内の調査で最大の課題としているのは、この遺跡群の研究であります。この問題は、まだ資料蓄積の段階であって、あれこれいすべきほどのものはもちあわせておりません。しかし、一つの方向は私たちなりに見定めているつもりです。

横浜市域の北部を鶴見川が流れています。この鶴見川の支流として早渕川がありますが、この早渕川の流域には多数の遺跡が存在しています。古くから遺跡の密集地として知られており、このなかには有名な遺跡もいくつかあります。この地域の大半が、港北ニュータウンの予定地とされており、近い将来には、人口30万の都市に変貌しようとしております。このニュータウンの予定地域内には四百数十ヶ所の考古学上の遺跡があります。さらにそのうち、現在、工事が進んでいる日本住宅公団の施行区域内には、二百数十ヶ所の遺跡が数えられます。私たちは、昭和45年以来、この日本住宅公団施行区域内の遺跡の発掘調査に携わってきました。現在までに約200ヶ所の遺跡の調査を終えることができました。このうち、縄文時代の遺跡は、弥生時代・古墳時代のものと重複したものを含めますと、約150ヶ所以上あります。その150ヶ所のうち、集落址として完全に近い形、またはそれに近い形で発掘されたものは、約30ヶ所ほ

どあります。それ以外の遺跡は、いわば一時的な居住址であったり、いわゆる落し穴の発見されることから狩猟場と考えられるようなものであります。

その30ヶ所の集落址を分析して、同時に存在した住居数を考えてみると、大きく三つのクラスに分かれます。2軒あるいはその前後からなる小型の集落と呼んでよいものが、ますあります。それから中型といってよい数戸前後の集落址。数戸前後という表現は、大変あいまいですけれども、そのクラスのものが一つあるわけです。それからもう一つは、大型の集落と呼んでいい、およそ10戸前後の規模のものです。約30ヶ所の集落址を規模で分けてみると、およそこんな具合になると思います。もちろん、小型にしようか、中型にしようかと、その分類に迷うようなものもあるし、また、中型か大型か判定しかねるものもありますが、大ざっぱな分け方をしますと、こんなようになるかと思うのです。

こういう三つの形態規模をもつ集落が、時期ごとにどう移り変りをしているかということですが、まず早期の集落についてみると、いまのところ、撫糸文土器を出す集落址が5ヶ所ほど発見されております。このうち、多い例では、5つの竪穴住居址が出土しています。しかしこれは重複したものがありますので、同時存在の住居は2、3戸になることが確実です。それから、僅か一戸だけという例も2ヶ所ほどあります。それから早期の中頃の田戸下層式土器を出した竪穴住居址が1戸だけ知られています。また早期末の茅山式土器の時期の住居らしいものが、2ヶ所で知られております。早期の集落址というのは、今まで発見されたものは、すべてこれは小型の集落であります。しかし、ではこの小型の集落というのは、早期だけの特徴であるかというと、そうではなくに、これは前期以降にもあります。前期にも中期にも、全域を発掘したにもかかわらず、竪穴住居址は1戸だけ、あるいは2戸だけしかないという例がある。また、後期になってもこの小型の集落は存在します。後期の中頃までは確実にあるようです。晩期の集落址は、いまのところ1ヶ所で知られているにすぎません。それは、どちらかといえば、中型の集落です。

一方、中型の集落はどうかといいますと、これは前期の一番古い段階ではちょっとわかりませんが、少なくとも前期の中頃以前の時期から出現するようです。そして、晩期の中頃までいっかんして存続しております。また、大型の集落とよべるものは、やはり前期の中頃から始まり、途中中期の終り頃にちょっととぎれるようですが、また後期になって出現します。これらの意味する問題については、まだ十分な分析が進んでおりませんので、断定的なことは差し控えたいと思います。

早期の段階の集落が小規模であるということは、これは他の地域の例にてらしても、間違いない事実であります。早期の人間集団が、2、3戸前後の住居の人びとからなる小集団であったということは、否定できないと思います。これに対して、前期になって大型、中型の集落ができるわけですが、この大型、中型の集落は、一定の形態をもっているところに特徴があります。それは住居の配列が、弧状または半円状を呈することで、その内側に広場をもつ点であ

ります。この広場をもつ定型的な集落が、中型、大型の集落の出現と軌を一にしているわけです。この定型的な集落は、前期から中期にかけて、やや、ふくらむ傾向をみせております。

ところで、この三つの規模のものが、前・中・後期に重なるわけです。そして、一地域内に混在しているのです。この問題は大変大事であると思うのです。さきほど、孤立した集落というものはないといいましたが、まさに一つの地区ごとに、こういう小・中・大の集落址が組合わさって分布しているのです。私たちが、例えば、荏田遺跡群と呼んでいる集落址群は、後期の時期のいくつかの集落址が比較的せまい地域に密集しております、その地域を離れると、もう後期の遺跡は存在しないという現象を示しております。こうした例は他にもあります、前期末の十三菩提式土器の時期には、一定の地域に遺跡がかたまっているわけです。ここでは、小型の集落と中型の集落が4ヶ所組み合わさって、一つの集落址群を編成しております。また、中期の時期には、古くから有名な三の丸遺跡を中心に、五領ヶ台、勝坂、加曾利Eの各時期の集落址群が濃密に集中分布している。その地区を離れますと、比較的稀薄になっているというような傾向が知られております。そういうわけで、このとくに前期・中期・後期にみられる各遺跡群というものは、これは統一してつかまえなければ、意味がないのだということがはっきりいえます。

個々の集落址を、まとまりのある一つの集落址群として、どのようにとらえていくかということについて、私たちはまだその有効な方法を確立しておりません。しかし、いまもちつつある見通しのもとにこの問題に精力的にとりくんでいきたいと思います。

(本稿に使用した港北ニュータウン地域内の集落址略図と写真は、港北ニュータウン埋蔵文化財調査団の調査員各位のご厚情によって掲載することができたものである。深く感謝するだいである。)

(1979年12月 日野一郎編『南関東の縄文文化諸問題—特講』武相文化協会)

#### 編集注

- (1) 大林太良 1971 「縄文時代の社会組織」『季刊人類学』第2巻第2号
- (2) 松村 瞽・八幡一郎・小金井良精 1932 『下総姥山二於ケル石器時代遺跡 貝塚ト其ノ層下発見ノ住居址』(東京帝国大学理学部人類学教室研究報告第5編) 東京帝国大学
- (3) 後藤守一 1940 「上古時代の住居(上)・(中)・(下)」『人類学先史学講座』15~17
- (4) 和島誠一 1948 「原始聚落の構成」 東大歴史研究会編『日本歴史学講座』学生書房
- (5) 和島誠一・岡本 勇 1958 「南堀貝塚と原始聚落」『横浜市史』第1巻 横浜市
- (6) 水野正好 1969 「縄文時代集落研究への基礎的操作」『古代文化』第21巻第3・4号
- (7) 林 謙作 1974 「縄文期の集団領域」『考古学研究』第20巻第4号 考古学研究会
- (8) 都出比呂志 1975 「豎穴住居の周堤と壁体」『考古学研究』第22巻第2号 考古学研究会
- (9) 岡本 勇 1955 「静岡県小笠郡大畑遺跡」『日本考古学年報』4 日本考古学協会
- (10) 茨城県猿島郡江川貝塚の発掘調査での所見である。
- (11) 日本考古学協会編 1949 『登呂』毎日新聞社  
日本考古学協会編 1954 『登呂本編』毎日新聞社
- (12) 神之木台遺跡調査グループ編 1978 『神之木台遺跡』